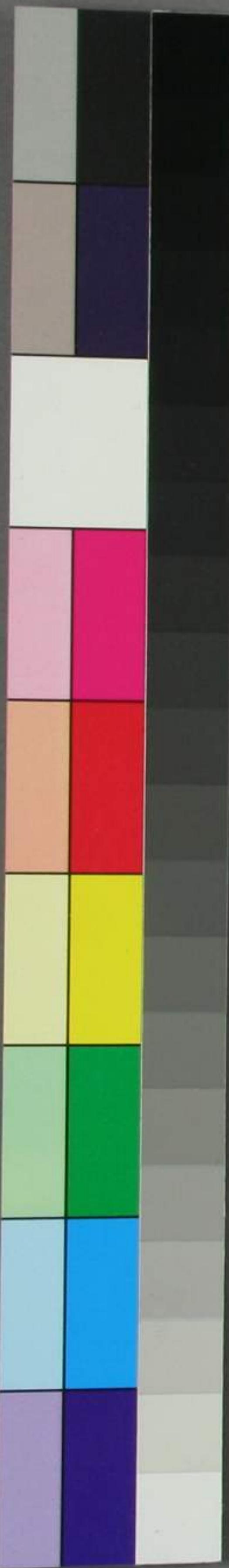


• 0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 51m JAPAN Tama

蝦夷風俗彙纂後編

十

ヲ 6
460
20



門ヨ宮
號 460
卷 20止

目次

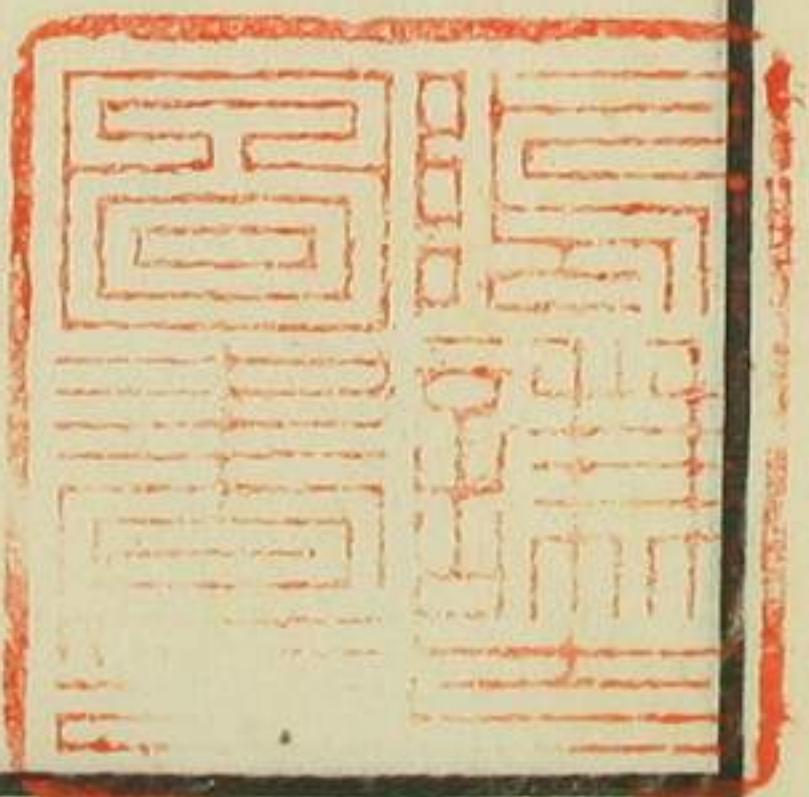
○卷十

一

蝦夷風俗彙纂後編卷十目次

○外事下

唐太島へ異國賊船渡來の事
擇捉島へ異國賊船渡來の事



蝦夷風俗彙纂後編卷十目次終

唐太島（異國相傳來の事）
唐太島（異國相傳來の事）

蝦夷風俗彙纂後編卷十

○外事 下

○唐太島へ異國賊船渡來の事

唐太島ハ松前若狭守領地の屬島なりといへども。往古ハ彼嶋へ渡る者のもなく。同嶋の蝦夷人。僅山丹人と交易したる品を。宗谷へ持來て。松前の人と交易した。漸々寶曆年間より。松前家よて。彼嶋へ手を懸け。寛政の始ふ至り。運上屋体の家居を補理ひ。輕き家來

も少々渡し。漁業その外處置をといへども。唯夏より初冬までの事にて。仲秋より至れば。家來を引取。番人體の町人三四人づゝ。爰かしあは運上屋より越年するまでなり。然るふ文化三寅年九月十一日。いづくば船とをあきざる異國の大船一艘。彼嶋の東浦オフイトマリヤといふ所へ懸りたゞ。此時ハ例の如く松前之家來引取たる跡なり。蝦夷家一戸あり。チウラツシタルといふ夷人住居たりしげ。其所へ異國人共二十人ぞり。革包の橋舟みて上り。何事ふうべらん。心易き様ふ申せども。言語分らば。兎角する内チウラブシク

ル。ゲ子比十七八歳なるを捕へ。船へ連行んとする故。雙親驚きやらじと爭へバ。銃炮を打懸て威し。遂に彼子を無躰ふ船へ連行。其家より眞鎗の如き板がねふ。横文字彫付たる札を懸置出帆し。夫より楠溪といふ所比海岸より。一里半程隔て懸り。其日ハ上陸の体もなく。翌朝そしけ船三艘革舟一艘。以上四艘。異國人凡三十人。石ど乗組上陸し。同所の運上屋へ來り。其内より鎗の附さる銃炮を持し者。戸口窓等の邊を固め。所々四人程づ。彼銃炮を打違ふ立て扣へたり。其餘を皆運上屋へ入り。一同腰を懸。煙草を呑居たる

ゆゑ番人ハサウエイモンジンどもよう飯ハシマツを出せし。少ヒタチし喰ヒムクて跡ハシマツをまき散ハシマツし。首領ハサウエイシヨウとも覺ヒツカタしき者ハサウエイモノ。懷中ハサウエイモリより書付ハシマツを出し何ハシマツりいへども。只日本商ハサウエイシヤウひといふ詞ハシマツのみ僅ヒタチ小聞ヒムクえて。其餘の言語ハシマツをべて分らば。羅紗ラサの切ハシマツを出し。商ひハシマツといふ故。商ひハシマツの制禁ハシマツみて成りがさきよし。手真似ハシマツしてあらせけき。首領大聲ハシマツを發し。外ハシマツふ居合ハシマツる蝦夷人ハサウエイモン皆逃出しけきども。逃入たり。其時居合ハシマツる蝦夷人ハサウエイモン皆逃出んとせし。四追捕ハシマツへんとをせび。番人ハサウエイモンジンどもふも逃出んとせし。四人とも殘らば。搦取ハシマツて元船ハシマツへ連行ハシマツ。繩ハシマツを解き砂糖ハシマツの入たる茶ハシマツを飲せ。艤と胴との間ハシマツ穴ハシマツへ入蓋ハシマツをして置た

ア。此番人の富五郎西藏源七福松といふものなり。夫より異國人。運上屋及び板藏等へ亂入し。米六百俵餘。酒數樽。煙草木綿膳椀の類。其外仕入物諸品残りあく奪ひ取。運上家板藏等。合せて十一ヶ所。外ふ辨天の社一ヶ所。神軀ハ奪取たり 網圖合舟等迄。悉く焼拂ひて。元船へ立戻りぬ。昨日捕へ置しオコヘトマリ比夷人ハサウエイモンジンウケシウルゲ子ハサウエイモニコ。此時ゆるして。同十七日迄滯舟。十八日より出帆せり。船長さ凡十五六間。幅四間。高さ一丈餘。兩側より大筒二十四五挺仕懸あり。玉の鍊様ふ見え。玉薬の木綿又の革袋ふ入り。食料の麥豆

小豆蕎麥などの粉を餅は如く製し牛は油をかけて
喰ひ番人どもふも是を與へ乘組人數は六十人餘内
ふ女も二人有て一人の子持あり首領と覺しきもせ
三人有て赤色サ長き帽子の如きもせをかぶモ白き
筒袖の衣類胸ふ銀サ牡丹懸したるを着し。その餘の
者も衣類同じ仕立て色の思ひなるを着し一同
ふ股引へ黒き沓をそき銘々ふ鎌炮を持たり首領の
内一人ハ劔を帶び二人ハ脇差をさし。その餘帶劔の
ものハ見えば既ふ唐太嶋ふ斯也如き異變ありとい
へども番人四人とも不殘捕それと成り。剩へ船をも

燒捨らされたれば松前家へ注進すべき方便もなくて。
其儘ふ成り居たるふ翌卯年三月ふ至り松前家より。
唐太嶋支配人徒士格柴田角兵衛といふもの宗谷よ
ア出帆し唐太島へ至り初て此事を聞大ふ驚き即時
ふ飛脚を立て注進したるふ其飛脚四月六日ふ松前
家へ着たるよし翌七日出同家よりは届書同十日箱
館の鎮臺へ來り。

此届書ハ殊の外簡易なり前文一部始末ハ其後追
々糺しの上記也。

翌十一日其趣を江府へ注進。此頃ハ既ふ松前家の

領地。松前西蝦夷地とも被召上て。いまざ引渡以前な
うといへども。公料ふ成たる上ハ。松やむべきふ可ら
い。此一事ハ過去たる事なきど。今異國人の仕業を考
るふ。蝦夷人ふも敢て亂妨せば。和人のみを苦しめた
る始末。何様心可りげなる所行あれバ。又もや何方へ
渡來せんも知づらじ。先西蝦夷地みて肝要といる所
所ハ。唐太の渡り口宗谷なきバ。今箱館近邊ふ可る所
の津輕家の人数を以て。此所を守らせんと思へども
人少し。先有合たる分八十人ふ。調役並源山宇平太下
役小川喜太郎。其外地役の者五六輩を添て。宗谷へ遣

しぬ。扱西地の要害場所ハ。爰れみふ可り。備を設く
べき所數多可れバ。然るべき勤番は諸侯ふ。早々命ぜ
らき候様ふと。江府へ申つき。猶その至り着む迄も
明置がたし。然るふ南部家ふてハ。素より國元ふ千八
百比。逞兵を備置。若事可らバ承らむと。兼て聞きし程
ふ。さらば其内一手分け人數二百五十人を。

定式の國人數。南部津輕の兩家ふて五百人なるゆ
ゑ。今二百五十人を以て一手分といふ。此南部家の
人數。其後追々差遣せ。然るふ其内又擇捉ふよりて。
此人數東西へ配る。

當分出し。新規勤番諸侯の人數至るまでの警衛をべき由を達し。此旨具ふ江府へ申。江府よりもさあく朝議ありて。唐太嶋ハ懸隔たる嶋みて。容易く事整ふべきふもやらざれば。先今年ハ手を下さば。宗谷みて見切。彼所を初せして。地方の警衛専らふをべきよし。執政方より促し給ふより。則其意を得て事を謀りぬ。執扱も此年四月下旬。露西亞船擇捉嶋へ渡來して。事ハモ々れば。則此船ふ。昨年唐太ふて捕へられたる番人。富五郎を初皆居たり。其船擇捉へ來り。オフユトマリウタリ等。又番屋を燒拂利尻嶋邊みて。船々と襲し

事あり。夫等も悉く擇捉一件の内ふ記す。休明光記

○擇捉島へ異國賊船渡來の事

文化四年卯四月廿三日。東蝦夷地擇捉島紗那會所より三十里程南の方ナイボといふ所へ。異國の大船二艘来て大筒を放ち。海岸より凡三十丁程隔て。舟ぢ繫留たるふより。先取のへどそこふ詰たる番人の内紗那會所へ注進として來し。其途中海岸みて。露西亞人六人見懸た。彼船ハ多分露西亞船みて有べしと申ふ付。會所詰合の官吏とも評定し。

此年擇捉掛吟味役格菊地總内。下役元メ戸田又太

夫。下役關谷茂八郎兒玉喜内。其外同心等并南部津輕勤番士足輕等詰合たり。總内ハ御用有て立返りよ箱館へ出。此時擇捉ふハ詰合せ。

關谷茂八郎同心并勤番足輕共を連て。ナイボへ赴く途中ふて間けバ。元船ハ沖合ふ繫置。異國人ども小船ふて上陸し。居合せたる番人どもを捕へ元船へ連行。漁小屋其外を燒拂たると。尚委細の事ハ追々注進せべき旨。戸田又太夫より批書狀。五月十四日夜箱館鎮臺ふ來る。此時正養在勤ふて。翌十五日其趣を江戸表へ注進し。先ふ唐太騷動ふ付。勤番の諸侯一手被命候

様ふと申つるべ。今又かゝる事も候つバ。猶一手を増以上二手。早々被命候様ふと申上さり。又箱館町人加賀屋宇兵衛手船。鯨魚積取て箱館より十二三里隔。矢尻濱といふ所ふ冲掛しける内。今月六日ふ冲合三里程隔て。帆二つ掛露西亞船の如き船一艘見掛け。そぞ云霧深くして終ふ其行衛を見失ひたり。全く異船ふや。又ハ當駄の船二艘列ありたると。遠眼ふ見誤たるふや。あらざるよし。彼船昨夜歸帆して。水主の者申たる旨。十五日の朝宇兵衛より申出たるふより。取留ざる事ふハ可れど。此事を江戸へ申上ぬ。

一五月十八日擇捉島。關谷茂八郎より書狀箱館ふ至
る。四月廿九日異國人ども。紗那の會所へ押寄せ。銃
炮を打掛け放火し。戸田又太夫ハ自殺。其外の者ハ會
所を立退たるとみみて。殊の外狼狽したる事の
始末。一圓分らざるふより。彼島より追々歸り来る
船方。其外の者ふ尋きバ。異國人ども多勢みて。擇捉
亂妨より引續き。國後根室厚岸の地をも襲ふべき
勢ふ聞えたりといふ。扱ハ擇捉の事ハ今ハ悔とす
力なし。此上地方へ立入せてハ安うらぬ事なれば。
此警衛あそ肝要あれ。先箱館ふ詰合たる。南部津輕

の人数の手を分。早々彼地へ遣せばし。又箱館の警
衛も欠げたし。總人数何程の内。何程宛ハそくへ
遣し。何程ハ箱館ふ残せべし。武器玉薬兵糧も差支
ざる様。夫々ふ配るべし。扱右の人数を以。所々比警
衛ハ迫る事足るべからず。されば南部津輕の家來
を呼出し。早々増人数を差出をべき旨促し。又彼賊
船。此上何程援兵いらんも計げよし。兩家せ人数よ
て足らざる時。近國の諸侯へ加勢の事申達をべ
き旨。兼て申上置をりうといへども。其期ふ至て達
せる時。遠路の事間ふ合ざるふより。羽州秋田佐

竹右京太夫。同國庄内酒井左衛門尉。臨時人數催促の書簡を認め。早馬を以て達す。其文如左。

東蝦夷地の内擇捉島へ。異國の大船二艘渡來。及騷亂國後嶋へも附寄可申報。相聞候ふ付。南部大膳太夫津輕越中守。彼地勤番候條。今度増人數の儀申達候。然處右異國人とも追々援兵を以。此方へ押寄可申程も難計。左候へバ兩家人數みてハ引足不申候間。銃炮組足輕大筒玉薬等支度夫々用意船ふて。早々箱館へ向け被差立。右人數一度ふ揃兼候。追々ふも可差立様存候。自然異變達候以上。

五月十八日

羽太安藝守 印

佐竹右京太夫殿

役人中

猶以酒井左衛門尉役人中へも。封書の趣申達候間。爲心得此段申達候以上。

以別紙申達候。人數の儀。御分限高も有之候義ふ

候得共。火急の變事大切の時節故。其心得を以人
數被繰出候様存候。扱又蝦夷地の儀ハ。海防第一
の地にて。異國人ども上陸致候ても。海岸遠く相
備。重ふ火炮を以。爭戰致候儀ふ付。弓鎗等より。鍼
炮人數多方。相當の地理ふ候間。右の心得を以用
意可被致候様存候以上。酒井家への書簡も同文
言。且兩家の返書とも。略也。

右如く其日の内。悉く手配ハなしたれども。扱江
府へ御届の事。關谷茂八郎。書狀のみみてハ。一向分
らざるふ。よう。彼地より歸りたる船方ハ。外の者共ふ

事の始末を問ひ。彼より云所を以て。菊地總内山田鯉
兵衛。兩人。御届を取調出せし故一覽する所。四月廿
三日ナイボへ來りし露西亞人ハ。詰合たる番人二人
稼方者三人を捕へ。番屋及び藏々迄焼拂たる事ハ。先
達て風説の通り違ひあく。其節の様子。露西亞人共。小
船ふて上陸し。扱薪水等の用辨ふも有べきやと思ひ。
去寅年出る御書付の趣むらきば。穢ふ取扱置しみ。
理不盡ふ右始末ふ及び。彼五人の外ふ。和人風俗ふね
うたる蝦夷人も。六七人捕へ船へ連行しげ。元蝦夷人
の由を申けきば。得と改たる上。彼等ハ残らず返し。五

人の和人のみ留置。夫より彼大船。紗那會所の方へ趣く様子。官吏を始。在住御家人其外一同。彼會所ふ集る。嶋中手當届ざる所の分ハ。番人共ふ紗那へ引取。且槳取といふ所ハ。得撫の渡口なるふ付。津輕家勤番の者ふ。在住比御家人と添て詰させ。所々手配して。彼所よ廿九日晝過。露西亞の大船二艘をせ來り。會所の前濱へ寄せ。大勢上陸し。銃炮を打掛たるふよう。此方よも打掛暫く争戦する内。支配人陽助といふ者。内股を打抜き引退たり。一船彼大船へ人數百人乗組。銃炮夥敷積來りし。此方ハ兩家勤番を始。總人數二百三

十八程詰合た。其内より彼槳取へ寺人數を分たれバ。全く紗那ふハ詰合ば。彼方の人數船ふハ。何程有るや知ざれ共。追々上陸したる分。凡七百人程有べし。此方ハ少人數を以ての取合なれば。必死ふ成て爭戦し。異國人六七人を銃炮ふて打殺し。其外手負たるものもゐる。躰ふみえ。夫あり夜ふ入。大銃四五手より打掛け候内。異國人ども。會所裏手の方へ廻り焼立たる故。今ハ防戦叶ひ難くして會所を立退。國後島の方。ルヘツと云所へ一同ふ引取時。戸田又太夫ハ跡より引しげ。異國人共ふ追掛うき。若虜とならば。外

國へ對し。本邦の恥辱ともならん事口惜して。自殺したるとの趣なり。其次第大低ハ。事も分しむよう。則其儘清書して。江府へ申上たり。又別紙を添て。彼南部津輕増入數の事。佐竹酒井へ臨時入數申達せし事等。具ふ聞えぬげあひらひ。

一十九日ふハ。箱館沖合。午未の方ふ當り。凡一萬石積程みて。帆を十一掛たる。異國サ大船一艘見え。次第ふ近寄り。地方より一里半右ビ隔て船を止。帆桁の上へ五六人上り。各遠眼鏡セ以て箱館の様子を伺ふ歟。さやうふ見えたる故。早速南部津輕兩家の入

數。并支配向在住同心等夫々ふ手當し。彼船附寄り狼籍ふ及づ。打崩さんと手配して待し所ふ。夕方迄汐首崎と云所ふ沖掛し。夫より惠山崎の方へ船と向け。何地共あくをせ行ぬ。此日南部領大澗沖ふも此類の船見え。昨日も津輕領權現崎の方ふも見えたるよし。追々注進ゆり。津輕沖ふ見えたるハ此船あるべし。大澗沖ふ見えたるハ。同日みて所も遙み隔たまバ。若別船みて有しや計ヶたし。則翌廿日ふハ。件の趣江府へ注進。扱此船何方の沖ふ掛居て。地方へ附寄らんを計難し。又此船ふも限らば。か

る時節あれバ。猶類船の來らむを計らまざる。より。兩家の人數晝夜とも陣を張。夜ハ篝を焚て警衛。

一 今度異國人共亂妨の仕方。和人ハ捕へ。其小屋等ハ燒拂。夷人夷小屋亦ハ手も附ざる心底。全く夷人をあづけむとする手段。ふも有べきや。東蝦夷ハ既み厚く御撫育もあき。夷人の心もたやすく傾く。まじ。それとも西地ハ是迄御國恩も蒙らば。其上松前家舊領ふぞなれたる事と。何となく本意なきやうふ思ひ居る夷人亦有。まじきふらうば。左から

ん所へ。異國人ども來り。若彼方へなづけあバ。傾くまじきふもあらば。されば今引渡以前なりといつど。今度上地を被仰出たるより。末永く御撫育の趣。よくいひさとし。酒煙草等のもせ夫々ふ與へ。厚く伏從を謀るべしと。其場所掛せ官吏どもへ促す。

一 擇捉亂妨したる異國船。五月三日同所を出帆し。何地へ行けむ。あらしハ見えざりしが。同月十四日西蝦夷地ルンヤの沖合。二艘共見え。廿一日ふぞ唐太嶋へ至。去秋燒拂たる番屋跡などを見廻り。

ルラタカと云所の番屋を又焼拂たるよし。松前の
家士ども同所白主と云所より居たれども。

是ハ去秋唐太一舉ふ付き。家老始め百六十人程。
先達て彼方へ渡たり。

異國人大勢みて防げたしとて。人數残らば宗谷へ
引取たるよし。擇捉宗谷詰の官吏どもより告來り。
六月七日江府へ注進す。

一擇捉詰せ面々ハ。一旦國後島へ引取たるよしとて。
擇捉争亂の次第を勧めましと取調。關谷茂八郎よ
り申越の趣ハ。其節支配人陽助銃炮みて内股を打

き。津輕家臣足輕一人。足は甲を打きたまども。いづ
れも薄手のよし。外ふ名の知きざる者も即死二人
あり。一人ハ石火矢臺の際より倒き。面射にげて分ら
ぬ。石火矢發したる時。怪我せしむる者有るづきや。兩
人とも衣服の躰を見き。漁業稼方の者もゐる
べしと覺ゆ。さきど其事頭取たる者。彼嶋を逃去り
しより。碇と乞うたく。又アリムイと云所せ蝦夷
人一人。紗那川向みて銃炮より死たり。敵の方
みてハ露西亞人三人。紗那會所へ上陸の時打倒し。
其外三四人も打しと覺えたまど。碇と見留ざる由。

卷十

紗那會所燒跡みて。露西亞人一人酒ふ醉ひ。夷人ふ對し我儘をふるまひしより。夷人ビも集り。三月三日の夕打殺したるよし。又會所番人行十郎と云者。五月三日夕。異國船出帆後。夷人と連れ。アリムイと云所の夷小屋へ立寄る。夷人の妹と外ふ一人の夷人居たる故。辨當と遣そんとて内ふ入。召連たる夷人兩人ハ。紗那會所の牀を見せ遣そし。飯を喫し居たる所つ。露西亞人一人銃炮を携來りしより。彼男女の夷人ハ仰天して逃去り。行十郎も外へ出。キナと云草の陰ふ忍び居て見きバ。彼露西亞

人ハ行十郎が喰掛たる飯を食ひ所々を見廻り。頻て行十郎が忍び居たるを見付。其所へ來り。頭よう肩先ふ撫あろし。手ぢ取引出し爐邊へ連行。何やらん咄し。アメリカ何々といひ。指を四つ折。ウルツブ。ふ。ホロン々々々あどいつども。言語分らば。暫く過て寐る真似をし。行十郎ふも寐よと云仕形むる故。露西亞人の側ふ寐轉びたるふ。頓て行十郎が傍ふ置くる。脇差ふ手と掛け故。取隠しなどむる内。最前紗那つ遣したる二人の夷人も歸來たり。其夜ハ四人共同宿を。行十郎ハ。此露西亞人を生捕ふせぞや。

と思ひ居たる所。追々外夷人ども大勢集う。是非殺をばしとひしめき。いりふ制せきども聞入らず。たゞ召捕されとも夷人ども大勢みて辻も助くべき勢ひあらざる故。今ハ是非なしてて行十郎脇差を以て露西亞人の胸を刺通し。夷人共寄合打殺したる由。

一又番人喜總次と云者と支配人陽助ウ子與太郎と云もの。五月二日アリムイの新道を通りし。何者とも知らず與太郎へ切掛。右の手サ甲一寸餘疵附らま。笠原をくぐる山越。ルベツといふ所へ逃去た

す。其時喜總次へ切りけたる躰ふ見えしづ。此者比安否いまゞ知ざる由。喜總次ウ事
未ふ記も以上の件々茂八郎より申來り。則六月十日詳ふ江府へ申す。一西蝦夷地。宗谷斜里邊へ送る。仕入物品々。松前伊達林右衛門ウ手船宜幸丸へ積入。五月廿日出帆段々下り。利尻島ふ澗掛して居たる時。同月廿九日沖の方より。異國船大小ニ艘をせ來り。其船より橋船二艘をおろし。彼宜幸丸へ向け頻ふ銃炮を打掛。素より町人の事なれば防べき手當もなく。元船乗捨。小船ふて天鹽と云所へ漕渡りたるよし。林右衛門訴

出る。此外先達て宗谷へ向け。御武器諸品も積入て
廻る。吉祥丸萬春丸と云御船。地役雇の者共乗
て出る。其安否いまご知り。此船の否ハ則此趣
三月十日江府へ申し。

一此時安倫ハ箱館下向の旅中成しう。

今年ハ西蝦夷上地の事付。江府より御用有之。例
より交代の時節たかへり。

先達て擇捉島へ直乗として出帆したる水主。同心
長谷川冲右衛門。雇醫師新樂閑叟と云者。東蝦夷地
根室迄もせ行しふ。擇捉騒動の事と聞。何きも彼島
一渡り見届べきと。猶又海路を急ぎ。國後島まで廻
まて様子聞けば。そや擇捉ハ落去せしといふ故。然
うば徃とも詮ふし。此上ハ片時も早く。箱館へ注進
せむやと乘戻たりしが。風順らしく佐井港へ着。箱
館への風待して居る内。此兩人より安倫旅中へ。擇
捉比次第いらまし聞くる趣を申越。五月廿三日安
倫より江戸へ注進り。其外南部領沖合異國船見え
たる。旅行先へ所々よう申出する。其事并
佐竹上杉。臨時人數被仰渡可然あど。品々江府へ申
出しどぞ。

正養より佐竹酒井へ人數の事申達したる事。安
倫ハいまだ知らハ故ふ本文如計ひたり。

一先達て諸家へ申達しよる人數の事。佐竹家への書
簡ハ五月廿四日國元へ着。直ふ翌廿五日より人數
出張。追々箱館へ着到の總人數五百九十一人。酒井
家ハ廿六日より着。六月朔日より出張。追々到着の
總人數三百十九人。南部家の増人數達し。廿二日
翌廿三日より出張。追々到着の總人數六百九十二
人。外ふ定式の人數二百五十人。都合二千二人あり。
此家々何處も怠りぬしといへども。別て佐竹津輕

書簡到着の翌日直ふ人數を出し。中ふ佐竹ハ
不意ふ達したる事なる。神速なる計ひ家柄と
云なぐら。格別ある事なり。計ひ家柄と
府へ申す。扱此人數の配り方。箱館ふ南部勢三百四
十人。佐竹勢五百九十二人。砂原ふ見張の爲のみ
ふ。南部勢三十人。浦川ふ同家の勢百人。厚岸ふ同家
の勢百三十人。根室ふ同家の勢百三十人。國後ふ同
家の勢三百八十人。松前ふ南部勢百三十人。津輕
勢三百三十人。酒井勢三百十八人。
合着到三百十九人の内一人病死なり。

合せて七百八十一人。アサシワよ津輕勢二百人。宗

谷よ同家の勢二百三十人。斜里よ同家の勢百人。各

武器玉薬兵糧等。厚く用意して備たマ。

一六月十一日安倫箱館ふ到着。日々ふ會合して品々
議論シ。

一先よ安倫正養より執政方へ申出はる。注進狀の御
返簡追々よ來り。入數の事を安倫が申よ依て。松平
政千代佐竹右京太夫へ。達給ふといへども。

不 安倫よりハ。佐竹上杉と申つるゲ。御評議よよつ
てかく成しと見えたり。

佐竹家へハ寂早正養より達し。入數出張したる由
ふ付。此上人數ハ箱館奉行より。猶申旨あらば出を
べし。仙臺家の人數ハ五百人程揃置。是も箱館より
沙汰あらバ。速ふ差向べしと促し給ひ。猶又南部左
衛門尉へモ。品ふあり。入數差出せべき旨達し給ふ
由。且非常の時。奉行旗持せせししてハ。不都合ふも有
べきあれば。用ふべき。其外品々仰下さる。餘ハ略之。
一今度の一舉ふ付。若年寄堀田攝津守正敦朝臣。大目
付中川飛彈守忠英。御目付遠山左衛門景晋。御使番
小管伊左衛門正容。村上大學義雄を遣され。追々箱

館へ至るべき旨執政方より仰下さる。

一六月十九日宗谷詰調役並深山宇平太より書狀來
至。先達て異國船へ連行たる唐太番人富五郎酉藏
源七福松擇捉番人五郎次左兵衛長内六藏木挽三
助。外ふ擇捉ふて捕へたる南部家火業師大村治五
平。都合十人の内五郎次左兵衛留置残る八人ハ國
後島より小船ふ乗せ歸したるやみて六月六日宗
谷ふ着き。彼國より書簡一通送達。表ハ彼國の文
字ふして旗の圖などをも画き。裏ふハ片仮名を以
左の如く書た。此文字を見安らんが爲
み傍ふ朱を以て文字と附

チカクキンシヨノコトニコサソロアイタ
近く近處の事ふ御座候間
シタノモノニモラシツケトカイアキナイ
下の事希ひふ遣し候て傍
ノコトコイ子カイニツカワシソロテホウ
輩同様ふ寄合吟味相
ハイトウヤウニヨリヤイキンミソウタシ
ノウヘアキナイシユヒヨクイタシソララ
ノ之上商ひ首尾能致し候
ワハマコトニシヤハセニツンシソウラヘ
共度誠ふ仕合ふ存候得
トモタヒ々々ナカサキヘシシヤラツカハ
シソウラヘトモタヽヘンシモナクヘンベ
し候得ヒも只返事もなく返辯

ネ ソ候ハ イひテテツツニシラ
 ノタ 口ロノのヲ追フムゴ御ハヘシシの便
 ハサ左ヤ易筋 マ迄サ座候
 タ澤ヤ様スジカ叶チア力ヒ人ラフト
 クサ山ゴ無イ致ナハセセヤトト
 シンシよサ御タシナ座シタ度ソ候
 ツ遣クタクウラ得コ心ハラ
 カソ候シニハラ得コ心ハラ
 ワシシヘコ心ハラ
 コあハハ口ノマ又カ掛マ末ハマ希ス
 ノマ又カケツコ希ス
 ゴ如タケニマタヒコ希ス
 トクニタニムダ代イヨ
 ニカト
 ニムフ船サ座コ心カツフル

ネン被ナサレソロユヘイヘンハシメテコノモ元
 トノテ天一下商様よう大きくして腹立ラタ
 チテアキナイテモナクハアカヒト同様
 ウニカラフトト此文詳ソ夫ヨ依
 チセセクくヨウモ申ソ夫レユ故此元モトの手並
 ト取上ケモウス申シソ口テキカナイトモキ、ウケナ
 リアケモウス申クソ候コノタヒコノモトノ手並
 ナニタヒコノモトノテナミニハキタノキタノ
 ナニタヒコノモトノテナミニハキタノキタノ
 ト此元モトノ手並受コト事トナニ見ナ
 チ地セセクくヨウモ申ソ夫レユ故此元モトの手並
 ト此文詳ソ夫レニヨ依
 リアケモウス申シソ口テキカナイトモキ、ウケナ
 ナニタヒコノモトノ手並受コト事トナニ見ナ
 ト此元モトノ手並受コト事トナニ見ナ

致
イタシモウスヘクソロ
申候

月日

オロシヤ

松前御奉行さま
マツマーラブギヨサマ

此文章も異國人の首領ミカラライサンタラエチと云者。日本詞を記しする小冊を所持し。其内より撰び出して詞を作り。唐太みて捕くる源七と云ものよ。片仮名をもつて書せくる由。此度歸りたる八人の者ハ。下役小川喜太郎差添箱館へ出づき。其時書簡の本書ハ持來るべとして。先寫を差越せ。

此八人の者追て詳ふ末文ふ記を。

糺問したる申口も。異國船大の方四十人餘。小の方二十人餘。合て六十四五人もゐるべきよし。此二艘の外當年渡來の事ハ。番人共聞及む。紅毛イギリス等。商船の出居る趣ふ聞たるよし。此異國船乗組の者名前左の如し

大船の方首領

ミカラライサンタラエチ

三十二三歳

下役

ヒヨウトロマルキチ

三十歳

イワンヤトルエチ

七十五歳

船頭

ヒヨウトロヤワノエチ

三十四五歳

商入

ミハラエチミツ子コウ

四十歳程

小船の方首領

カフリウハイハノエチ

二十四歳

右異國船。當年ももとや歸帆を告げきやの趣ふ。番人共聞たるよし。宇平太より申來り。其始末并書簡の寫等。即日江府并正敷朝臣の御旅行先へ同心大貫専助

天野喜左衛門。早馬を以て注進を。

此早馬正敷朝臣。日光御旅行先へ。六月廿四日より達し。江戸へ廿六日より達し。二百里餘の行程七日半より達し。格別神速比由を以て。御慶美として銀二枚づ。外より箱館御入用の内よう。金三兩づゝ。取らをべき旨。大炊頭利厚朝臣のたまふによす。村垣定行計之。

一先より宗谷へ向出帆したる御船二艘の内。吉祥丸ハ事なく彼地より着。萬春丸ハ武器其外品々積入。地役雇の者。森重左仲内野五郎左衛門上乗し。利尻島の

内ふ。繫居たりし折ウラ。五月廿九日沖の方ふ大筒の音頻々響き。異國船渡來したるにて。同所ふ繫居たる商船共騒ぎ立。其内伊達林右衛門が手船宜幸丸へ。異國船より銃炮を打掛らされたれバ。乗組せ者共傳馬船みて逃來り歎き申ふよう。萬春丸の水主共一同ふ狼狽し。我ちくと舟舟みて逃去り。いふ制され共聞入ざる故。是非なく左仲五郎左衛門も。武器内百目筒一挺。三十目筒一挺。十々筒四々五分筒三挺。胴亂五つ。其外火縄口薬等漸ふ舟舟へ積入。三里を乗出し跡を見り。利尻の方ふ當つ

て。大ふ煙立する故。萬春丸ハ燒拂それする事ふ有べきやと。六月朔日此兩人宗谷へ來りて申ける由。翌二日ふハ萬春丸の見届として。兩人共合圖船みて乗出しだる。沖中みて風變々れば。ノツシヤフと云所みて風待し。同六日跋海といふ所迄至りし。異國船より戻されたる番人共ふ行合ひ。萬春丸の事を尋きハ詮なしとて。其儘宗谷へ漕もどりたる由。彼利尻を立退時。萬春丸ふ殘置する品々ハ徒具足二領。同心具足八領。五百目大筒一挺。四々五分筒二挺。合藥十五貫目。鉛二十貫目。米三百五十俵。

味噌三十樽。醤油三十樽。酒二十樽なり。是等を異國船へ取らきしや。焼捨らきしや知らざるなり。六月廿八日江府ふ申す。

一かくて六月廿八日比夜ふい。彼異國船より戻されたる番人七人と。大村治五平を。小川喜太郎グ率ひて。箱館へ到着したり。翌廿九日一同呼出し。糺問せらる。去年九月十一日唐太島亂妨の始末。及び同所の番人共ヶ捕きたる事などハ。前の唐太一件ふ記したるグ如し。船の大きさ。銃炮の様子。人物。模様等。詳ふ唐太一件の内ふ見えたる故不贅。夫。より此者

共ハ彼船中ふ在て。麥豆。小豆。蕎麥などの粉と。餅の如く製したる物を。與へらきて命を繫ぎ。九月十八日。ふ唐太を出帆し。段々そせ行。十月十日。ふ露西亞國東察加近邊まで至りしが。風順よからずして滞船し。漸々十一月五日。至り東察加の内。ヘトロハウシユイと云港ふ入。間掛して居る内。水主五六人づゝ。日々上陸して旅宿の手當し。同月廿日過一同ふ上陸して。彼四人のむけハ。同所の飛脚屋カフリウハメエケニアチキリフウヘルと云者の方を旅宿として。四尺四五寸ふ七尺餘も有べき一間なる所

一 同住居し。疊ハなく板敷みて。唐太より持來り
し薄縁を敷。彼船み乗組居たる。鍛冶オウセミマキ
セムエチヒフウロウと云者。晝夜附添て世話し。首
領あり差圖のよしハ。唐太より取來きる米を。日々
四升程づゝ受取。玄米のまゝ飯よかしき。鮭の鹽煎
などをそへ物よして。朝夕二度づゝ給させたゞ然
るふ或る時。宿の妻女彼煮たききる鍋みて。足を洗
ひたるを見附。何よりむさくるしき故ふ。彼附添の
者へ談じ藥罐を借りて。手賄よして。飯も玄米みて
も食ひふくきふより。桶をかゝ少しづづ搗て用ひ

たゞしげ。ゐる日首領ミカライサンタラエチ見廻
ふ來り。是を見て米といふをもるぞと尋る故。米の
皮ぬりてハ。腹ふりとぞ給ふくき故。日本みてハか
くして用ふと答けきバ。然うバ左致せよとて歸り
ぬ。此所野菜の類ハ一切なく。魚鳥類又ハ牛内を。赤
人共ハ常の食と。米も少しハぬきども。飯よかし
く事なく。たまゝ粥よして食ふ。其米ハ古米の如く。
至て軽くして風味惡し。首領は旅宿彼等が居所よ
り一軒置たる隣みて。四間ふ六間程の家なり。硝子
窓打ぬり。疊ハなくて物よ腰を掛て居て。卧坐時ハ

木綿布團ふ。鳥の毛を多く入たるを二つ敷き。其上へ卧せハ左右折まくるまる。其上蒲團一つを掛け。枕も木綿ふ。鳥け毛を入れて。長く縫ひたるを三つかさね。中くぢみて顔へくるま。枕元ふ。剣并鑓の付たる銃炮を掛置た。四人の者共日々此旅宿へ呼き。砂糖の入たる茶。并麥蕎麥粉を。餅の如く乞うるを給せん。此所家數三十餘戸。皆山海の獵師なり。商家ハ唯一戸ふ。革類反物穀物茶蠟燈油。其外品々をひさぎ。反物ハ羅紗。更紗。天鵝絨。木綿類なり。爰ハ露西亞國の内け田舎なる故。よき品をねし

といふ。此地一圓海岸みて山をあり。海岸ふハ土手を築き。大筒五六挺或も十挺程づ。仕掛けた。銃炮車臺挿入たる藏ニ棟。焰硝藏一棟。穀物の入たる三棟。此藏々并首領の旅宿へ。足輕やうけ者一人づ。蝦夷刀け如くなる抜身を以て。晝夜とも警衛を。露西亞ハ寒國と聞しげ。此地ハ左様ふもあらじ。却て唐太嶋ふどよりハ凌ぎ能方なり。寺も一ヶ所あり。住持も總髪ふ。筒袖の衣ふ似たる物残着し。袈裟を掛け。妻帶肉食なり。俗家ふも釋迦の像ふ似たる者を。板も書き朝夕拜を。又牛ハ餘程あり。日本

の牛ふ變る事なく。少しこき方ぬう。荷物の用ふ
ハ遣もせして皆食料と。犬も日本の犬ふ變う。雪車を挽うせて用我ね。猫ハ至て拂底ぬ。鳥類
も數多ぬ。馬ハ一向ふなし。オホツカと云所ふハ
少しゆきども。荷物の事せみふ用ひて。乗る事ハせ
ざるよし。味噌ハなく。醤油ハぬきど拂底ぬ。酒ハ
焼酎の如く至て強し。去年十二月十五日。大船の首
領ミカライサンタラエチ同道みて。東察加代官
の所へ行。其月の廿九日ふ立歸りしげ。當正月中旬
頃ふ至り。東察加の代官。ハヒヨウイハノエチと云

者此地ふ來り。ミカライサンタラエチ其外の者も。
渠々旅宿ふ行体ぬ。其翌日ふ至り四人の番人。彼
代官の旅宿へ越すべきよし。ミカライサンタラエ
チ、ぐいふよよう。參りたるふ。上座ふハ代官其次ふ
ミカライを初。其外船中ふ乗組たる足輕以上の役
人共。何きも床机ふ腰と掛け。入口ふハ足輕三人。鎗の
附たる銃炮を持て守りたる。其時代官四人の番人
と對。ヒサシイ々々々々といひけきども。何事ふ
や分らぬ。夫ありミカライへ向ひ。此者共ハ當國の
詞を覺えたりや。酒とのむやと尋ぬ。詞も少しひ覺

え。酒ののむよし答へけきバ。あらうバ代官持參の
酒なりとて。一盃づゝを呑せ。やうて彼面々品々談
じの休みて。足輕百人も連行べしと云ける時。夫
も及ぶまじ。船ふ在合する人數みて。事足なんと答
へたるをば。聞取たきども。其餘も知きば。此者共去
年中より。露西亞人ふ交う。言語も少しふ通じ候故。
是程ハ聞たす。此代官三日逗留して歸りたり。此者
ハ去る年長崎へ使節ふ來りたる。役人せ兄のよし
ふ聞う。又或時三カライサンタラエチゲ方へ行し
よ。日本みてハ何品を好むや。金銀鍍羅紗の類を伺

るやと尋しゆよ。金銀鍍銅の類ハ潤澤なり。毛類
ハ日本の産ふ非きバ。長崎ふて交易して萬欠事な
し。その外絹布織物などハ。結構なる品多く有て。聊
も不自由なけきバ。何品好むといふ事もなしと答
へける。日本人羅紗を衣服ふせば。暖なる上丈夫
ふて然るづしと申ゆよう。日本ハ暖國故。毛類を着
る事ねし。只合羽火事ふ用るぬなりと答つたり。
彼國ふてハ何品を好むや知らざれ共。米鹽味噌絹
類拂底ふて。分て海氣と尊ぶ駄見えたう。扱又我
輩を捕へしハ。何故ふやと尋しゆ。去る年長崎へ漂

流人を送りて。使節を遣し。交易の事を願し。其事叶そば。以來船を寄も。燒拂そんとの事なる故。成べき程ハ日本を燒拂。彼國の人をも捕へ來きと。國王の命ふよう。唐太の一舉ふ及びしと答へしふよう。いりで日本ふてハ。さぞのまは不法の所置ハゐるべき。そハ全く其國の聞違ひなるべし。日本へハ其譯聞えず。今度の仕方ひたまう。海賊の所行とせふ。聞えしと申々きバ。さればとよ亂妨の事。素より本意ふれらば。交易の願ひ叶ざる故。止事を得ざる所なり。全く海賊筋ふれらざる證據ハ。彼奪取たる

品々燒拂たり。家藏船等ふ至迄巨細ふ記し置。通商整ひたる日ふ至らば。悉くつぐのふべきよし。國王の命ぬうと云て。暫く思惟したる体ぬうしげ。然らば通商の願書を遣すべし。されど露西亞文字を讀難うるづれバ。日本の詞を。日本文字ふて裏書みべしとて。青き紙を取り出し。ミカライ則筆を取て表書認め。夫あり日本詞を記したる小冊を取り出し。其内より撰出して。一勺々々ふ詞を作り。此通り日本文字ふて認よと云故。源七やがて片假名を以て裏書し。よみ聞せたるふ。宜しき由ふて受取置ぬ。前し

たるハ則此夫より四五日過て。又二枚裏書せよといふ故。何故みや問へバ。一枚ハ本國ふ遣し。一枚ハミカライグ扣ふむるよしいふふあり。則又二枚認め。外ふ源七ヶ手覺ふ一枚認あきぬ。

此覺の一枚ハ源七ヶ荷物内ふ入置し。何方ふや失ひたるといふ。

夫より四月三日ふ至り。去年唐太より歸帆したる大船の方。ミカライサンタラエチを始。四十二三人乗組。四人の者共をも皆其船ふ乗せ。小船の方ハカフリウハイハノエチを始。三十二三人乗組。其

日ふ澗口の外へ乘出し。日和を見合。同七日ふ至り。順風みて二艘とも出帆し。段々とせ行。同月十八日九日の頃ふも。得撫島へ着寄べき心構ふてり。もしが。十九日の夜より大風雨ふなり。いづくともなくもせ行。廿日は朝ふ至り。大なる海岸へ着寄たれども。小船の行方知きざる故。或ハ乘戻し。或ハ舺船など出して所々を尋。廿二日の夕方ふ至り。漸々小船と一所ふ成候へども。廿三日の朝又彼海岸へ着寄。又船頭水主等上陸して。土地の様子を見る。ふ船を作たるや。材木板などハ阿まど。濱邊ふ人も見え

ざるよしみて。旗一本持歸り。見ればアツサノボリ大明神と書。下ふ總兵衛三助作之助太郎助豊七左兵衛長内と記したり。扱ハ得撫へ行心掛成しが。彼島ハいつり乗をづして。爰ハもや擇捉なりとて。其日ハ同島の内。ナイボと云所の海岸より懸り居。廿四日の四時頃より至り。小舟の方より首領カフリウハイハノエチを始三人。番屋へ入て腰を掛け。帳面と覺しきを出しこれを出し。何やらんいへども。其所より詰合たる番人共ふ言語通せば。只日本と云たる事のみ分りたる。きせるとかせと云如き真似をする故。番人左兵

衛煙草きせるをかしけきバ。やがてたゞおを呑居のみみて。様子ハ分らば。飯を出しなれば。濱の方へ持行手を以て撮み食ひ。又そあふ鱈の干て有しと見て。くれよといふ手真似見る故。筵より盛興つた。又其所よりイタニシノと云蝦夷人の居たりしが。頓て其者を連て。一同ふ元船より返り。イタニシノへ。銃炮一挺玉一つを與へて歸しける故。異國人何用をう申つると尋る。何やらん申なまきども分らばといふ。扱船中居る所の唐太番人共。露西亞人共。此所ふて何事をうきらんと。心ならば思ひ居る内。其

日の八つ半時。大船より首領を始。二十人橋船より乗
り。何きの場所へう上陸し。夜より入元船へ歸り。家八
十二軒有。ども入ハ居ざるよし。油一樽三味線
一挺。薄縁一枚。鮮魚少々持歸り。その夜ハ二艘共同
所より掛居た。板をナイボみてハ異國船渡來ふよ
つて。紗那へ注進の飛脚を出し。又々来るべしとて。
用心し居る所より。廿五日より至り大船の方より。首領
を始十二人。小船の方より首領を始十二人。ナイボ
へ上陸し番屋へ押入。番人五郎次左兵衛長内六藏
木挽三助。一同より搦め橋船より連行。藏より有處の米二

十三俵。木挽鋸大工道具等。并仕人物の古綿入四つ。
白紺の木綿二三反つ。其外番人共の所持の衣類
夜具脇差等奪取。番屋所々火を掛。一同元船へ歸り。
捕へたる番人共ハ繩を解き。砂糖の入たる茶を呑
せ。唐太の番人共より二所より置たり。廿三日大風雨よ
て。二艘同所より掛。廿七日の朝出帆。子丑の方へもせ
行し。オイトと云所の沖にて。日本船一艘見ゆる
由より。番人どもハ穴へ入置。
艤と胴の間を穴といふ。そあへ入て上より蓋を
す。

頻ふ銃炮の支度などある様子ふ付。而それ日本船無難ふぬきかしと。一同神佛ふねぎ事して居たる内。俄ふ卯辰の風強くなり。彼船を見失ひたるよしを申ふよ。各心を安んじ船行する程ふ。廿八日ハ雨降風強く。頻ふ丑寅の方へそせ行。廿九日ふハ紗那の沖ふ至り。四時頃海岸より一里程隔。大船掛半里程隔て小船掛けり。頃て大船より。首領を始二十人ほど橋舟ふ乗組上陸し。小船よりも八人程乗組せしが。風烈くて陸へ寄がたく。元船へ戻たり。夫よモ陸地みての始末ハ。いづく有しやあらば。七時過

ふ至り。濱邊ふ五六ヶ所火の手見え。間もなく大船よう上陸したる者も。元船へ歸来るよあり。三カライサニタラユチふ。紗那の様子を富五郎尋し。通商願の書簡を持て上陸し。露西亞の禮なきバ。筒先を空ふ向て銃炮を打しげ。日本の方よろ銃炮を打掛だるよより。止事なく此方よろも打掛。日本人五六人も打殺し。味方ふも手負三人ぬきども。薄手ねりと語し故。火の手の見えしいいうと尋々れば。ぬきもこあるより焼たるふもあらば。一同引取り跡みて。燃立たうと答へたり。

此銃炮せり合ハケ様みハカラで初ハ赤人の方
より打掛ゝる由。焼拂の事も津輕陣屋ハ敵み取
切らきて都合惡しとて此方みて焼拂たれど。其
外ハ皆彼等ゲ方みて焼たるよし。末文擇捉よう
歸たる同心どもゲ申口ふ詳なり。番人どもハ始
終船中ふのみ居る故。陸の様子何事もあらば。彼
同心共ゲ申口の條ふ。陸の次第ハ委しく見えた
ア。

其夜ハ二艘とも同所ふ掛け。翌五月朔日みハ大小
の船より。凡四十人許上陸し。大筒を打掛け。一同ふ大

聲みてオウタ々といへバ。船中ふても同じく聲を
合せ。夕方ふ至り品々積入歸船したり。其品數の凡
を見るよ。大船の方へ取入たる酒五六十樽。米三十
俵程。臭足五六十領。弓六十張。長柄二十筋程。并百目
以上と覺しき大筒一挺。二三百目の短筒百三挺。小
筒三十挺許。金丸籠の纏一本。旗幕等も見えたまど。
數ハ聴と知き。金屏風二雙。十手一本。大小三通り。
脇差四五十腰。玉箱一つ。火繩。并衣類。椀類等なり。小
船の方へ取たるハ二三百目的大筒二挺。小筒十挺
餘。長柄二十筋許。臭足二十領。矢箱二荷。玉箱一つ。脇

差十四五腰。其外酒類椀類等も見えたり。
御武器ハ成丈持退し。猶殘るも何るべく。是
今爰よ云所ハ。多分南部津輕家の道具と見えた
マ。

此諸品を持運びしハ。朔日の夕より二日の朝迄な
マ。同日四時頃。紗那處々火手見えたり。又其夜
八つ時頃ふもや有けん。船中より助けくれよとい
ふ聲聞えける故。番人共目覺誰ぞと問つバ。津輕家
の足輕ある。紗那みて捕もきたるといふ。此男一
眼みて。顔を一圓水ぶくきの如く。よ腫き。至て見苦
歸したり。

敷身なり。翌朝より至り三カラライサンタラ卫チ是を
見。此者。向しき病あきバ。船中より置がれしとて橋
船より乗せ。ミカラライより書付を渡し。此書付擇捉の
役人より渡さばし。いひ含める様子より陸へ送り
歸したり。

此書付ハ。後より擇捉みて殺したる。赤人の懷中より
有して。在住平島長右衛門より差越。江府へを
申上ぬ。是則先より源七ヶ裏書したる。書簡三通の一
通なり。又此足輕の事。津輕家へ達して。さもなく
よせんさく。よど行方あれど。いりふして赤人

の懷中よ。書付ハ有けんいぶうし。
又水主イワンミカライといふ者。紗那つ上陸の時。
手を負ひなやみ居たるを。帆柱へ縛り付置くる故。
いうあきバ手疵らる者と。かくひまくるやらんと。三
カライサンタラエチ。源七尋けきバ。日本人を殺
すあじと。兼ていい付置たるを用ひ。此方あり差
圖もせざる内よ。銃炮を打掛たる故。斯の如く仕置
さるよし答つゝる。

是を以て考き。前は銃炮せす合ハ。彌赤人の方
より。始たる事と見えたり。

夫より三日比夕七時頃。兩船とも紗那港出帆し。翌
四日戌亥の方へそせ行。船中よて三カライサンタ
ラエチ源七よ云様。十餘年以前。露西亞國の者。得撫
島みて破船し。彼島へ上陸して。未歸らざるふよう。
行て糺さんと思はる。そからしげも擇捉へ着た。然
るふ。彼所よ露西亞人の衣類碇など。何。彼者共を
ば日本の役人。殺しこりと。比噂を聞り。今船中よ捕
へ置たる擇捉の番人共。此事を尋よといふ故。則
五郎次よ尋しふ。碇。先年得撫へ渡りたる官吏。富
山元十郎。深山宇平太携來て。今擇捉み。何。衣類ハ

先ふ露西亞へ漂流したる日本人。南部牛瀧村。繼右衛門等。彼國よう貴ひ來れるなりと云故。其よしをミカライサンタラエチへ答けるふ。日本人ハ偽のみ云て信じざし。いづき得撫島へ渡りて。實否を糺まべしといふ。彌日本人赤人を殺したるふ決しなば。唐太番人四人も殺さるべしと。富五郎源七より堅く詞をつひ。得撫へ向て行しげ。風順よからば所々よ滯船し。七日晝頃。漸彼嶋へ着寄り。赤人三人上陸し。間もなく二尺よ六七寸許の板よ。横文字書たる物を持歸り。先年渡りたる露西亞人の内。王

人ハ病死し。残モハ彼島を立退くるよし書付有り。彌源七セブ申せし如く。日本人の殺したるふハカラビ。和人も偽のみいへど。源七セブ言ハ偽なしとて。ミカライ疑を晴したり。夫より十二日迄沖シマよまぎう居。其日の晝過。國後島アトイヤの邊シマふいた。暮頃より寅卯の風ふなり。酉の方へそせ。夫より日々處々の沖をそせ行。十八日暮頃よ至り。唐太嶋シレトコの海岸あり。一里程沖シマよ掛り。翌十九日比朝。船頭ヒヨウトロマルキチ。その外のへ數ハ聴と知らば。同所へ上陸し。間もなく蝦夷人十人許連來り。大船

へ乗せ酒を呑せ。富五郎源七も彼夷人ふ逢づしと。
ミカラライサンタラエチゲいふふ任せ。行て見るふ
皆知たる夷人なる故。唐太嶋の様子を尋けるふ。去
秋富五郎等げ捕をきたる後。富内と云所の番人三
人越年して居る故事のよしを告たきども。未楠溪
亂妨跡の見分もなく。當春ふ至り。松前より支配人
番人等渡海し。初て其事を聞。仰天し巨細ふ様子を
問ひ糺して。宗谷へ乘戻したりといふ。夫より夷人
共ハ歸り。ミカラライを始め。同所へ上陸せんと支度
し。富五郎源七も參度思つ。參るべしといふ任

せ。則兩人も俱ふ上陸せしよ。其時赤人の内より水
主一人逃去り。追掛みきば。山深く入て知きば。是を
露西亞人ふらうぢ。アメリカより來り居る人のよ
し聞えぬ。夫より一同ふ。同所の酋長ユラトコマツ
力と云者の所へ立寄りたるふよア。富五郎源七よ
り。彼酋長ふ嶋の様子を尋るふ。當春松前家よう下
すたる支配人。其外疑惑残生じ。去秋番人共の捕ま
しも。夷人共赤人ふ馴合。手引したるあるべしなど
いふ故。一同迷惑し早々番人を下し。是迄の通り介
抱ふぬづかり。漁業したきよしと。松前へ小使蝦夷

を遣し願出たるよし。又宗谷へハ公儀の御役人有
大勢殊ふ唐太のミラタテへハ松前家士も來来る
なりと出し居る内ミカライ彼酋長へ酒を呑せ。四
尺程なる緋羅紗と銀みて作りたる國王の像を與
ヘ。外ふ四五寸四方の紙へ横文字書たるを渡し。此
後赤人船多く參るべきふより。此書付出し見いべ
し。左からバ米酒切類何ふても。望の品を與べしと。
懇ふいひ含め。外夷人共へも。玉類切き類など。少し
づ。與へタるふより。富五郎源七密ふ彼酋長と傍
へ招きたとへ赤人より何品を貰ふとも。必從ふべ

のらば。此由外夷人どもへも。よくく申含べしと巨
細ふ云諭し。一同ふ此家を立出。又モヤライシヤモ
と云酋長の所へ立寄。酒を呑せ。切類などと與へ。夫
より一同濱邊へ出。的を立。銃炮を打て夷人ふ見せ
る。ミカライハ阿マアシク。其餘の者ハ皆中う細
のなり。又夷人の飼置たる熊の子と二足所望し。銃
炮ふ打殺し。船へ積入食料とい。夫より一同元船へ
歸り。夜ふ入乘組の者へ夥しく酒を呑せ。何達も醉
卧たる時。ミカライサンタラユチ艤の方へ廻り。大
鼓を烈しく打られバ。醉卧たる者共一同ふ起立。櫓

へ上う銘々鐵炮を打拂ふ。此手廻し至て速のなり。其日別て手際よきものハ賞し。不手際なる者ハ其輕重ふ隨撻つと二三十より四五十ふ至る。折々此事として調練せしむるなり。翌廿日。ふハ大船の方より。ヒヨウトロマルキチを始十人。番人福松も乗組。小船の方よりも五人程。いづきも橋船ふて乘出し。唐太の内ヤハンベツと云所へ上陸しける。夷小屋ハ三戸。阿達ども入ハ見えび。其夷小屋の前ふ杭ありて。少さき箱を懸置たり。ヒヨウトロマルキチ其箱を卸して。中より銀ウ硝子の如き玉と。切ま

類を取出し見て又箱ふ入。猶其上へ切ま類を少し足して納め。元の如く杭へ掛置たり。其様彼者共。去秋此所へ來りし時。掛置たる箱ふてもあらんやと見えたり。いのある故斯しつるや知きば。又彼蝦夷小屋あり。鴨々と云酒に入る器を三つ取出し。酒を一升程づゝ入。濱邊へ杭を三本立。是を掛けたり。前の箱此鴨々杯ハ夷人へ與へる心ふてもあらんや。其子細聞ざる故よ知れど。夫より一同元船へ戻モ。翌廿一日。ふハ未申の風ふてそせ。同嶋の内オフイトマリと云所ふ掛り。ヒヨウトロマルキチ。ヒヨウトロヤ

ワノエチを始。其外何人乗組たるや知れず。同所へ上陸し。番屋一軒。雜藏一棟。物置一ヶ所焼拂ひ。元船へ立戻り。又晝過ふなりて。楠溪海岸より半里程沖ふ掛り。船頭水主八人。并源七も上陸せし。蝦夷人一人も見えじ。濱ふ圖合舟一艘引上らり。長さ一尺五巾七八寸。ららむと思ふ。真鍮の板がねとみよしひかふせ置たり。文字ゑり付有しやいなや見届け。是も赤人共。去秋來りし時の業ならん。夫より直ふ一同元船へ戻りたる所へ。エモシカイホトタラリンオケエンタルと云。蝦夷三人圖合舟ふ乗り。源

七等を尋て元船へ近付たる。ミカラライサンタラエチが見付。頓て元船へ乘移して酒を呑せ。唐太の番人共と呼び迎ふべしといふ故。面會しいのなる事みて來りしと問へ。異國船渡來ふ付。夷人共一同山へ隠き。タキども源七を見掛け。懷しく思ひ尋來きうと云故。唐太擇捉の番人。并大村治五平等。異國船ふ捕もき。今日ふ及たる迄のららましを。五郎次ふ認させ。宛名ハ唐太支配人平兵衛と記したる書状。エモシカイホダ脊中へ密ふ押入。早々松前へ届けよといひ含め。

此書狀松前より差出し。執政方とも内々見せま
ひらひ。

頓て夷人どもハ。酩酊したるみよう。イハンベー口
エチ送りて陸へ返したり。其夜同所の沖ふ掛る。翌
廿二日の晝頃。ルウタカ海岸より一里程沖ふ掛る。
ミカラライサンタラエチを始め。二十六七人上陸せ
しづ。間もなく火の手見え。七時頃より大釜五つ
持歸うたる故。其様子を尋ねし。番屋二軒。藏九棟
辨天拜殿焼拂たるよしを申す。廿三日より廿八日
迄ハ。或ハもせ或ハ滞船し。廿九日至う卯の風にて

をせ行たる。終ふ見馴ざる山ひとり見え。何地と
古辨へざる。河きハ禮文尻あるべしと。ミカラライ
サンタラエチ。いふ内。靄晴てよく見きバ。禮文尻
みて。番屋。杯幽み見えたり。その時ミカラライ大ふ笑
ひ。源七等ハおのき。國をあらば。我ハ遂ふ見ざれ
ども。繪圖を以て知きりとて自負した。其日七時
頃。日本船見ゆとて番人どもをハ穴へ入。人數何程
う知らば。橋船ふて乗出し。暮頃鎗炮の音烈しく聞
えしづ。頓て晦日の朝ふ至り。橋船四艘ふて。千石積
餘と見ゆる大船を挽來り。其船ハ宜幸丸と題した

る大船なり。米五百俵程。酒十四五樽。衣類少々。元船
ふ積入。六月朔日ふハ鹽三十俵程積取。猶殘たる鹽
其外の品す有るやと見えしげ。其日は晝頃此船を
燒拂ひたり。是伊達林右衛門手船宜幸丸其日も風あく。夜中沖北
方ふ漂ひしげ。ニカラライサンタラエチ。富五郎源七
みいふ様。今度汝等ふ書簡を持たせて。松前ふ返せ
べし。唐太せ番人共ハ。去年よう露西亞ふあうて。可
なりふ詞す通せるなまきバ。書簡を持せ遣をしてお
分るべし。擇捉の者共ハ。いまご通辨を出來ざる故。

五郎次左兵衛を残し置ん。尤隨分大切よいゝもモ
養ひ置づし。擇捉ふ居たると同じ事ふ思ひ心を安
んじ。親元ふても案じざる様。書狀を遣まづしと。懇
み云含たり。翌二日ハ申酉の風ふてモせ行し。宗
谷とノツシヤブヒサ沖合ふ當て。日本船見ゆとて。
番人共と穴つ入。元船二艘ともモせ行。大筒二聲發
し。間もなく日本船を見よといふ故。穴あう出て見
きバ。松前家の手船吉祥丸ふて。乗組の人ハ見えば。
頓て彼船より長柄二筋。素麵二三俵。衣類の入たる
葛籠三つ。大船の方へ積取。小船の方へも。衣類等持

運ぶ舶ふ見えた。夫より又利尻の方へ乘戻した
る。同所ふ帆柱のなき赤船一艘見えた。

是則森重左仲内野五郎左衛門が乗捨たりし万

春丸ぬ。

其時大船の方より乗出せしう。頃て彼赤船ふ乗移
り。大筒を放ち。一同ふ大聲を發し。白地の木綿ふ。黒
く文字附たる旗を押立。鎗一筋合藥焰硝の入たる
樽一つ。具足二領取來き。翌三日晝頃利尻嶋へ水
汲ふ行たる水主ども。日本的小船一艘挽來を見ま
ば。松前市中の船。誠龍丸の舡船なり。同四日より至り

彼赤船あり。五百目許の大筒一挺。百目筒程の臺許。
焰硝合藥三升程。米數俵。酒五六樽。日本繪圖一枚。蝦
夷地圖一枚。唐太繪圖一枚取來き。此外衣類夜具
等。漁船へ積入たる。近くなりて覆う。皆海中ふ入
た。夫よりヒヨウトロマルキチを始。五六人利尻
へ上陸し。番屋藏々みて。焼拂たると覺えて。煙三
四ヶ所ふ見えて。誠龍丸よりも火の手上りぬ。万春
丸ハ夜み入焼拂ひたり。翌五日より三カライサ
ンタラエチ云様。赤船武器も積入る。然るべき
大將も乗組たらん。利尻山へ立。退たりと覺えた

モ。此大將を捕へあバ。番人共ハ殘らば返モベシ。いざや搜せとて三十人上陸したマしげ。晝頃返り来て。山みハ一人も見えざる故。家藏圖合船等焼拂ひ歸ウタモといふ。夫ありミカライ富五郎源七を招き。大將を捕得ざるふより。先ふ云つる如く。彌汝等ゲ内二人を留めて。八人を返モベシ。土産の爲何みてモ望の品向うむ申べしと云。故素あう望の品ハ向うざれども。歸國北上露西亞の產物。何品をして交易を望ヤト。御尋もあらん時北爲されバ。羅紗其外の切類少しづづ貰むやと。仲間一同ふ商議し。

ミカライム申つるム。是ハいと安き仕事なり。爰有合くるハ。去る年長崎へ見本ふ持行たる品みて。古びたきども與ふべしと。卷物内あり裁て。羅紗六切。露西亞織三切。花布二切。小切きハ切。外ふ露西亞文字の書籍二冊。頭巾一つ。コツフ五つ。鏡一面。角細工一つ。内み針匙三本。露西亞仮名書たる物一枚。繪圖五枚を與へたり。

此品々宗谷へ持來り。江戸表へ廻して。執政へ捧ぐ。

渡船ふ。彼誠龍丸の舟を貰ひ受しげ。船具不足ふよ

う。櫂八本。碇一挺。綱二筋。帆一流を貫ひ。又船中の料として。白米三俵。素麵一俵。醤油一樽。酒一樽。大薬罐三つ。鉄一挺。鋸一挺。鉛二挺。鑿一本。煙草十王を與へたり。其時ミカラライ。先ふ源七セブ裏書したる書簡を取出し。四隅を封たゞしげ。又思惟せる牘みて。此書簡江戸へ出をべし。松前ふても一覽する事なるらんふハ。便ならじとて源七ふ渡し。松前ふ至り奉行ふ達をべしと云故。返簡ハ何地へ届くべきやと問へば。來春唐太得撫擇捉の内へ来るべ乞きバ。彼三島の中へ出をべしと。又通商の願ひ叶フ。上白中

青下紅の旗を立べし。我輩今年もオホツカへ歸帆せなり。汝等相かまへて宗谷へ行事なく。速み松前へ至るべしといふ。則其旨を得て出帆せしげ。さるふてモ。赤人の宗谷へ行べくらびと云しりど。彼所ふハ御役人も詰たモと聞及べバ。夫々指置松前へ行バ。手後まみ成べし。いざや宗谷へ行んと。船中一同ふ商議し。頓て彼方へ向てもせたりしげ。其夜宗谷の内。ユウブツと云所へ至りしふよう。其處ふ野宿し。翌六日の朝乗出し。一里許も行たるふ。靄の中より帆影見えぬる程ふ。也そや露西亞船の先へ廻

またるふや。いのうひせんと驚しづ。左をあくて。彼
万春丸ふ乗組たりし。地役雇の者共。彼船の成行
を見届とて。利尻指て行ふぞ有る。かくて彼の者
共。あり。万春丸ハいあふと問ふ故。早焼捨だモと答
へられバ。然らば利尻ふ行てモ詮なし。宗谷へ歸る
べし。汝等も此船ふ乗きといふ故。則八人の者共。彼
船ふ乗移モ。其日八時頃宗谷へ着く。深山宇平太を
初。同所の官吏ふ。事の始末を述さうといふ故。五月
十八九日の頃。彼等が乗組たる露西亞船。松前南部
箱館邊乘廻たる事ハなきや。其外ふ彼國より船の

出たる事ハ。聞及ざるやと尋しふ。其頃ハ唐太の邊
ふ居たきバ。松前邊乘廻したる事ぬし。露西亞より
此外船の出たる事も聞及ざきども。イギリス阿蘭
陀商船も。出居たる由聞及びたりといふ。

是をイギリス阿蘭陀より出たる船ふや。又ハ露
西亞より。イギリス阿蘭陀へ遣したる商船ふや
と尋しふ。其所ハ聴とあらばといふ。然らば五月
十九日。箱館へ見えたる大船ハ。是等の内ふも
るべきや。さきどもイギリス阿蘭陀より出たる
船ならん。其頃南部箱館の邊乘廻し。下蝦夷地の

方へ行べき謂むなし。恐らくハ露西亞より彼國へ行たる船の歸帆をもふてもなりしや未詳。夫より大村治五平を尋る。彼を南部家の火業師みて。擇捉嶋ふ詰合たる。四月廿九日異國船渡來ふ。詰合の官吏より差圖みて。足輕共を連き。會所山上の草を刈取らせ。屯塲を手當し。同家の火業手傳役宮川忠作大畠忠平等ふも。夫々足輕を差添。各鎗炮を持せ。防の用意をねひ。板戸田又太夫關谷茂八郎申ふハ。彼夷人ども何う申旨有て。來けるやも知れざきバ。猥ふ鎗炮打事なく。彼等ら事情を聞

を。専一とをばしとて。支配人陽助といふ者ふ。玉どめのあるしを持せて。海岸へ進ませし。彼方より大筒小筒を頻りよ打掛。陽助手負たるふ。今ハ此方よりも打べしと申ふよつて。忠作忠平其外十四五人。辨天社の脇へ出張り。各鎗炮を打掛る。同異國人の方より。臺仕掛けの大筒を引上げ。厳しく打掛けたるふ。治五平も十数筒を以て打拂ひしげ。玉薬盡たる故。取來んとて。會所へ行く途中ふて。異國人の鎗炮ふ足の甲を打れ。陣屋ふ入。布ふて巻立たきども。歩行不自由ふて。防戰も心も任せざるふよ。

り。會所川上の方の山岸より庇保養して居たる内。其夜九時頃。會所の人數ハ引拂たりと聞々れど。歩行なりがときより。彼所より野宿し居たるより。翌五月朔日より異國人ども上陸し。會所其外と亂妨し。二日みハ歸帆したる様子みて靜となり。病も少し和らぎ々れば。會所の躰をも見届せや。辨天社の後口迄出たる所へ。川中の方より赤人一人出来り。それ日本と聲を掛。拔身と持打掛る故。治五平も拔合せ。二太刀三太刀打合内。異國人六人程各銃炮を向。取圍みたる故。振返るにて坂の段木へ。疵ある方足

を踏みけ。横さまに倒れぬき。異國人ども其儘折重り。二の腕を繩みて縛り。會所脇土手の上へ引行たり。そちふ異國人二十人程を居て。藏々より米豆等を運びたり。水一つくれよと。手真似して見せゝまゝ。藥罐み入持來り。呑せたり。かく運盡て捕それたまばとて。首打てと仕形して見せたるより。其内頭立たる者。赤人ハ日本人を殺さげ。頓て送り歸せべきさま手真似し。夫より腰繩を付け。サクソヘツ比方へ四五丁連行。日本人々々々と指させ其様。會所の人數ハ何方へ立退たるやと。尋る躰み見えけ

る故。頭をふりあらげと答々キバ。又會所の人數ハ何程と問ふ休みて。役人々々いつる事のヌ間えける故。是又ちらざる趣を。手真似して見せられバ。其外いろいろ尋る様子ぬうしげ。分らざるゆゑ答へざりしフ。其後ハ何事も尋ねば。板會所の邊敵味方の死骸なども見えビ。異國人二人酒ふ醉たる躰みて卧し居たりしロバ。八つ時頃彼二人と治五平を端船ふ乗せ。大船へ連行。繩を解穴へ入たり。そあふハ唐太擇捉の番人共も居たり。程あく首領ミカライサンタラエチ。治五平と呼出し。船繩みて腰袋三重

廻ふ縛り。舳の方へ連れ行き腰を掛け。半時許置いて繩を解もとせ處へ歸したり。是より陸みて捕る。時刀を拔刃向ひたる故。一旦の咎なき共。そや構ふき由。ミカライより源七へ申たり。又治五平を役人と心得居様子ふ付。町人ありと申なしくきよと。源七へたせみ。漸々申取帳附の趣を成さう。又異國人ども源七其外の者ふハ咄ちをれど。治五平ハ言語一向通せざる故。何事もいそび。夫より彼得撫唐太等へ乗廻し。利尻みて番人共と俱み小船ふ乗組。宗谷迄歸たる始末ハ。富五郎等七人びいふ所仕如し

といふ。且異國船の様ふ。大筒仕掛け方等の事。治五年
六月廿五日。江府へ捧ぐ。

一擇捉島ふ詰合たる同心の内。羽生宗次郎小嶋官藏
粕屋與七井瀧長藏橋本義八と云。五人せ者共。追々
箱館へ歸來れるふより。彼嶋爭亂の始末を尋るふ。
四月廿五日の曉。ナイボようは飛脚。紗那會所へ至
り。異國船渡來の由告來れり。關谷茂八郎彼所へ趣
みより。宗次郎官藏與七井梅澤富右衛門と云者。都
合四人從ふべきよし。茂八郎よう申渡し。南部津輕

銃炮方の者三人。足輕二十六七人。大筒小筒の銃炮
と用意し。圖合船二艘ふ乗組。其日廿四時頃出帆せ
しづ。向ひ風みて歩ぞらひ。夕方シイムイと云處へ
着寄り。野宿して居たる處へ。ナイボようの飛脚の
由。蝦夷人兩人ふて書狀持來り。茂八郎其狀を見て。
彼飛脚を直ふ紗那へ遣したす。何等の事云來りし
や。其子細ハあらび。翌廿六日の朝出帆し。夜中も走
り行。廿七日の曉方ふ至り。ホロ々々といふ所へ着
寄りし。下役兒玉嘉内。ナイボ番人一人。蝦夷人六
人。此所の岩穴ふゆりていふ様。去る廿五日ナイボ

へ上陸し。番人四人と稼方の者一人を捕へ元船へ連行。番屋藏々等焼拂ひたる由語るふよう。扱もナイボよりハ。紗那の方心許なし。急て紗那ふ立歸す備つあいづして嘉内も此方の船ふ乗組。船子等をせり立て急ぎし程ふ。其夜の中ふ。紗那へ乘戻しだう。翌廿八日の早天ふハ。同心ども一同ふ會所へ出し。各手分して銃炮玉を鑄立。竹鎗を拵へ。暮頃までふ。大小の玉八百餘。竹鎗三百本程仕立。夜中も代るゝ海岸を見廻り。翌廿九日は早天會所へ出しふ。戸田又太夫關谷茂八郎がいふ様。今度ハ安らぬ

珍事なまば。いづきも身命を抛て働くべし。異國人ども上陸したりとも。此方より差圖せざる内も。猥ふ銃炮打づくらげ。駆引の合圖ハ。太鼓三つ打バかゝ。四つ打ハ引べし。兵糧方も兒玉嘉内引受て計るといつぞも。猶廻り兼る事あらバ。宗次郎も世話をべしといふ故。其旨を得て。各銃炮玉薬等受取。宗次郎ハ會所の上山手へ。蝦夷人二十人程連行草を刈らせ。南部家の火業師大村治五平と。足輕二三十人。津輕家の火業師。姓名不知足輕二十人程連來り。同じく草を刈取らせ。凡八十間四方をどよ地とならし。

兩家は幕張亦會所前土手上ハ。十間餘の所へ三尺程板を打。其内へ南部家の幕張長柄四十筋旗一流纏一本。津輕家みてハ。彼家は勤番所後遠見場所へ幕張見張の者と附置。各備戎設し所。九時前より至る。異國船二艘來り。大船の方も海岸より一里程隔て。十ヨカと云沖の方へ寄り船を留め。小船の方ハ。紗那會所より二十丁程隔て繋たり。扱異國人ども何歎申旨。何うて來きるや知きざきバ。猥うふ殺伐を用ひ。其事情を察せば。先玉ごめの合圍戎せよと。又太夫茂八郎より支配人陽助へ促しければ。

則白木綿を三尺程木先へつけ。陽助是を持て海岸へ進む。其跡へ義八富右衛門官藏與七。并園田武右衛門といふ同心。いづきも銃炮を持附添行。海岸ふ至り。陽助彼合圍戎布を振たる。橋船より三百目許の銃炮を。陽助へ向て打掛けたまど。玉を脇へそれた。其時與七小筒を彼橋船へ向け一發しける。陽助是を見て。今異國船より打たるを。玉筋ハ此方へ向たきども。若や合圍の心なる。も知きざれば。先此方より船へ向て打ん。山の方へ向け玉拂ひして。然るべしと申ふ。異國船二艘共銘

々車櫂を抑立々る故。扱ハ合圖戦受たるならんと
思ひ居る内。異國人共皆々上陸したる故。會所へ行
て其旨を申ける。然らバ異國人ども會所へ来る
べけまば。もそや案内ふ及む。彼等がせん様を見
よやとて暫くためらひなれば。異國人どもハ。只海
岸み立並ひたるせみみて。何の様も知れざる故。か
くてハ果じ。何と申旨も阿モや。參りて承るべきぞ
と陽助が申ふ寄り。然らバ最前の如く同心どもへ
附添ひ行べし。若陽助と捕へなどせば格別。左もな
きふハ努々銃炮打べりらばと。又太夫茂八郎申ふ

付。其旨を得て一同打連濱邊へ進し。陽助懷中紙
を取出し。左右ふ振々王止め仕方を見せけまども。
會得せざるや頻ふ打掛々る故。進み難く引戻しひ
る時。小筒みて陽助が内股を打たるふよう。其旨會
所へ申。銃炮打べきやと伺ひし。今ハ打拂ふべし
と。又太夫茂八郎を初。南部家の人数と一同ふ。辨天
社の脇へ出張。筒先を揃て打立し。異國人どもハ。
川向北柏藏へ取籠り。銃炮を打出すふよう。此方の
人數ハ。會所土手上へ引分け。左右より打掛互ふせ
ず合居たる内。柏藏脇の蝦夷小屋より。夷人一人立

出しづ。敵の銃炮より中りて死したり。又辨天社の下
ふも粕藏なり。官藏其粕藏の板を破りて。其所より
三百目筒を打出せし。異國人の籠うたる粕藏を
打抜。餘程色めきだる躰ふ見えたり。又南部陣屋の
山手より同家の火業師大畠忠平三百目筒を。橋船
へ向け打出したる時。異国人共ハ彼粕藏ふ火を掛
て。

粕藏五六ヶ所焼たりと云。且津輕勤番所ハ敵よ
取切られて。都合ぬしきとて。此方より焼り。

一同橋船ふ取乗り。元船へ引取たり。此時七半時頃

なり。夫より一同會所へ集うし。兩家雇足輕を初
番人職人漁業稼方のも。蝦夷人等悉く逃去り。兒
玉嘉内見えび。大村治五平も七時過より見えび。只
會所ふ居たる者ハ。又太夫茂八郎。御用金と小者ふ
持せて立退かせたり。此用金國後と經て箱館へ來
る。暮時過より異國船ふて。折々大筒の音聞ゆる故。
兩家の入敷并同心ども海岸へ出。此方よりも打掛け
たり。又太夫茂八郎两家の役人。一同ふ事と議し。
もとや玉薬を乞ひけり。此會所みてハ防ぐたし。
一先立退。アリムイと云所の番屋へ引取べられ。

同心共附添參るべしといふふよう。一同ふ引取る時。打殘たる合藥を取集め。南部家の火業師宮川忠作ふ渡し。同家陣屋の前ふゐる。一貫七百目の大筒を打せたり。

此王敵の元船をかきむだる休みて。繫う場を遠ざけたり。

九半時頃。又太夫茂八郎宗次郎與七武右衛門富右衛門長藏。并森彦十郎大橋專藏といふ同心。銘々鏑炮を持。曉七時頃アリムイ番屋へ至り。間宮林藏百姓ふて。蝦夷地御用雇なう。海邊を見渡し。異國船一

艘大筒を打。此處へ寄來るべき体なりといふ。あうらば爰み阿らんも。然るべくらげとて。同所と立出行程ふ。皆々跡先ふ成。五月朔日晝頃。アリムイとシベツとの間ふて暫く休うひ。かくて一同ふ勞き甚しき。今宵ハ爰ふ野宿し。阿モこそシベツへ往め。と又太夫ぐいふふより。木枝などと折て火焚。一同休居たる内。又太夫見えざるゆゑ。彦十郎傍の山手へ登り見る所ふ。地役と同心共と此頃ハ
地役人と稱也。 知らば。其様ぬやしきふよう。一同ふそせ行見まゝ。そや事きれたり。其時擇捉み來り居たる鍛冶共。又

太夫タツブが蒲團カヤツを持て居たる故。直マタ其蒲團カヤツを打させ。彼者共ハチガタを番ハシモトふ附置ハシモトサセ。宗次郎ムロジラウハ茂八郎モハチラウを尋て。ルヘツルヘツは方カタへ。十四五丁行ハシモトたきども逢ざる故。立戻タチモタク見きバ。番ハシモトふ置たる者。一人も居ざるふより。扱ハシマツももや茂八郎モハチラウが來りて見届ミタケの上。番ハシモトふ附置たる者共も。引連行ハシマツさうんと思ひルベツハシマツをさして急ぎハシマツしほどよ。其夜の初更頃ハシモトふ至り。彼所ハシモトふ着しげ。其所ハシモトふモハチラウ其外ハシモトのハシモトもせ見えざる故。扱ハシマツをフウレベツハシマツの方カタへ行しならむ。跡ハシモトをあこひ行ハシマツむやと思ひしげ。其所ハシモトふ大河ハシモトなり。川向ハシモトひふ船ハシモトを見えハシマツれど。渡ハシマツべき夷人ハシモトも

ハラされバ是非なくルベツハシマツふ夜と明し。翌二日ふ至り。夷人ハシモト一人夷船ハシモトふ乘來りしと見受。其船ハシモトふ乗て川を渡り。漸々ハ時頃フウレベツハシマツへ至りたるふ。其所ハシモトの蝦夷小屋ハシモトふ。茂八郎林藏モハチラウリザン。并兩家の役人足輕。雇足輕稼方職人など。都合四十人程居たる故。又太夫自殺の始末を語りし。茂八郎も則其場所ハシモトへ至り。様子見届たれども騒動の中故。死骸の取始末もなア兼。其所ハシモトふ有合たる者共を。一同引連來し由ハシモトをいふ。專藏與七ハオサウシと云所ハシモトより。海岸通りと行たる故。又太夫が變死ハシマツをあらげ。五月朔日夕方ふル

ベツへ着間もなく山の手方よう。茂八郎彦十郎長
藏富右衛門武右衛門林藏。兩家の役人足輕其外の
雜人等。追々ふ來う。彼と共ふ又太夫ヶ事を初て
聞て驚嘆し。夫よりいづきも一同ふ。フウレベツふ
至う着ぬ。官藏ハ廿九日の夜。ナヨカ口と云所へ。異
國人上陸せしも計う難々れば。見て來るべしと。又
太夫茂八郎ゲいふふよう。九時頃彼所ふ至り。南部
勤番の山よりスミバ。人五六人居る体なり。闇夜ふ
て聰と分らざれども。異國人なるべしと思ひし故。
急て會所へ立戻りしげ。そや人一人もあらざる故。

後の山手八九町退く頃夜も明々れば。シベツ川の方へ。十町程も行たる所へ。山手比方より兒玉嘉内及漁方の者五人出来り。きぬ嘉内が妻子。何方へ立退。行方をきざる故。所々尋居る内ふ。海岸よう。鍼炮打掛會所へ立戻難く。山へ籠り居たる由戯いふ。夫より嘉内官藏ブクシヤと云草の根。或ハ百合。ビ根などを堀喰ひ。其所ふ五月三日まで野宿し。同日晝頃。川迄四五丁行しよ。蝦夷人七八人居たりしげ。其内あり二人矢を射掛たり。

是ハ野心有ての事ふをあらじ。異國人共紗那亂

妨の紛き。此夷人共米酒等掠取たる事ありて。
其役人より其吟味ふ所そん事を恐きか。るる
まひぬりしうと云。菊地總内先ふ箱館ふ出居た
ましう。擇捉一舉ふ付。とく彼地へまうりし故。此
二へサ蝦夷ハマツチが仕方。輕からぬ事あれバ。よく百
明をとげ申越せしと云おくりぬ。

彼蝦夷の内ノボリサンと云も。彼川筋二三丁上
のアシガ小屋ふ。嘉内官藏と伴ひ養ひ置し故。此所
よ五日の朝迄居さりし。先ふ紗那會所よて。鎌炮
疵負ひる支配人陽助。此川上ふ保養して居たり

しう。異國人歸帆したる由を聞。紗那會所の様を見
んとて。嘉内官藏が居たる所へ來りし故。則三人一
同ふ紗那ハマツチみ行てみる。會所藏々南部家勤番所等
悉く燒拂たり。會所の後せ草原ふ一人の骸あり。身
の内ふ疵なし。其所へ津輕家の雇足輕來り。是ハ彼
家の足輕ある。臆病みて果たりと云。又夫よう少
し脇。蝦夷小屋の前よ。異國人死骸ぬり。黒羅紗筒袖
の衣服を着し。同股引をとき。切疵突疵矢疵ぬり。是
も夷人共集て殺たりと云。此始末前。出つ。叔此三人又太
夫茂八郎ハヤシヤスジが成行を知らば。アリムイの方へ行バ。逢

事もちらんやとて。其日は晝頃彼所へ至るふ。爰アヘも異國人の死骸疵等らり。是ハ番人行十郎と云者アシタラの殺たる由。此始末見ゆ前時より此處の山辻手あり。そからりも嘉内カニが妻子。并津輕家の雇足輕四人。南部漁方の者五人。大工夫婦の者など出来り。先恙なきを悦合。一同圍合船スルメイより乗り。ルベツルベツへ渡りて止宿し。六日の四時頃フウレヘツフウレヘツへ至りたる。茂八郎其外の者。蝦夷小屋エホウより居る故。面會して品々談合しけり。義ハハ四月廿九日の暮頃より。紗那海岸サナカイを見廻り。五時頃會所へ立戻し。一人も見えセキ。其時

も陣場見廻りとして。一同出たる由の處。夫といひあらば。立退たる事と心得。會所後手アヒタハシ山四五丁行たる處。支配人陽助并番人喜總次。小使與太郎。漁方の者十九人居たる故。其所みて夜を明し。五月朔日同所を立てシベツシベツより止宿し。二日みハ其川上へ至りし。陽助ハ銃炮疵ツバキより。歩行成シテくられバ。漁方の者負行しげ。笠原深く越難きより。陽助喜總次與太郎ハ其所アヒタより残り。其外一同。三日みハルへツツふ至り。四日暮頃フウレベツフウレベツへ着。茂八郎その外のもせふ逢。夫より一同商議の上。一旦國後へ渡り

萬事と取調。茂八郎ハ品より。又擇捉へ戻るべし。
嘉内を初同心共。兩家の役人雜人等も箱館へ行べ
しと。茂八郎が申ふより。同心共も是迄附添たる事
なきば。達て留う度由を再三いへども。糧米等も乏
しく。萬端便ならざるふ付。是非ともふ登るべきよ
しを申ふよう。力及び出帆し。追々箱館へ至り着ぬ
といふ。

此申狀も悉執政方へ捧。爰みハ一二の大要残舉
る也。且關谷茂八郎兒玉嘉内が申狀ハ正養が
退役の後。進達み成りし故。今爰み記さば。

一七月十一日御使番村上監物義雄箱館着。上下三人翌
十二日御目付遠山左衛門景晉着。上下三人同廿六日
若年寄堀田攝津守正敦朝臣。上下三百三十七人八月廿七日
正敦松前市中より。海岸通り見廻り。此節ハ異國
船も歸帆して靜謐ふ成。殊ふ旬季もあくれ。もとや
渡來も成難き時節み付。云々。

一九月十二日ハ順風みて。正敦初。諸有司と俱ふ正養
も松前を發し。三既一着。略下休明光記

す。少く勢力。三種。一書。不。參照。著者。大
家。良。十二。書。本。序。五。題。附。首。言。同。此。是。王。秀。
通。多。被。稱。為。有。才。之。人。子。孫。
而。其。子。孫。中。有。之。事。學。雖。也。見。張。之。中。其。誠。以。異。國。
苦。手。書。戲。而。舞。舉。安。五。持。時。周。三十。才。入。八。民。母。去。日。
十二。日。時。日。吉。泰。山。五。書。門。景。魯。唐。土。不。三。西。八。良。母。去。日。
并。其。書。目。不。三。三。之。三。之。

蝦夷風俗彙纂後編卷十大尾

明治十四年二月出板板權届
同十五年二月出板

開拓使

東京本郷弓町二丁目八番地

製本所
臨池社

東京日本橋區通一丁目

東本西

稻田佐兵衛

京橋區南傳馬町一丁目

發兌書肆

吉川半七

岩代國安達郡二本松

同

十五年二月出

太田勘助

明治十四年二月出

